

## 神性宣言と五回目のメシア的奇跡②

### □アウトライン

#### 神性宣言 **イエスを神として信じなければ罪の中で死ぬ**

- A) 神性宣言 (ヨハネ 8 : 21~30)
- B) 罪とサタンと死からの解放宣言 (ヨハネ 8 : 31~59)

#### 五回目のメシア的奇跡

- C) 生まれながらの盲人の癒やし (ヨハネ 9 : 1~14)
- D) 癒やされた人への指導者層による尋問と追放処分 (ヨハネ 9 : 15~34)
- E) 癒やされた人の霊的救い (ヨハネ 9 : 35~41)

**彼は「主よ、信じます」と言って、イエスを礼拝した**

①

②

## 五回目のメシア的奇跡

### C) 生まれながらの盲人の癒やし (ヨハネ 9 : 1~14)

イエスは、仮庵の祭りの期間中に、五回目のメシア的奇跡を行った。生まれつき目が見えず、「罪の中で生まれた人」と言われ続けた人の目を見えるようにした奇跡である。

1. イエスが通りすがりに、ある人を見つけて、じっとご覧になった。その人は生まれたときから目の見えない人であった。彼は、祭りで大勢の人が往来している通りに座り、物乞いをしていたのである。弟子たちは、この人についてイエスに質問した (ヨハネ 9 : 1~2)

1~2 節 さて、イエスは通りすがりに、生まれたときから目の見えない人をご覧になった。弟子たちはイエスに尋ねた。「先生。この人が盲目で生まれたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。両親ですか。」

- だれが罪を犯したからですか・・・弟子たちのこの質問は、当時のラビたちの教えを確認しようとしたもの。「目が見えないという障害をもって生まれてくる人は、その人自身か、両親か、どちらかが重い罪を犯したからだ。よって生まれつき目が見えないというのは神のさばきである」と当時のユダヤ教の教師 (ラビ) たちは教えていた。
- メシア的奇跡・・・旧約聖書にそのような奇跡があると教えられているわけではないが、当時のユダヤ教のラビたちは、生まれつき目が見えない人の目を見えるようにする癒やしは、神のさばきを取り消すことなので、普通の人では不可能、もしそれをできる人が現れたら、その人はメシアである、と教えていた。

2. イエスの応答：この人が罪を犯したのでもなく、両親でもない。この人に神のわざが現れるためである（ヨハネ 9：3～5）

3～5 節 イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。この人に神のわざが現れるためです。わたしたちは、わたしを遣わされた方のわざを、昼のうちにを行わなければなりません。だれも働くことができない夜が来ます。わたしが世にいる間は、わたしが世の光です。」

- この人に神のわざが現れるためです・・・イエスは、この人が罪を犯したのでもなく、両親でもないと答えた。そのうえで、この人に神のわざが現れるためだと言った。
- わたしを遣わされた方のわざ・・・イエスは、仮庵の祭りの期間中、すでに人々に対して、「わたしを遣わされた方」は父なる神であると言った。さらに、次のように神性宣言をした(参照 メシアの生涯ハイライト第 15 回)
  - イエスもまた「わたしはある」という者、すなわち神である
  - イエスを神と信じなければ、人は自分の罪の中で死ぬ
  - イエスを神と信じたら、その人は罪とサタンと死から解放されるよって、「わたしを遣わされた方のわざ」とは、イエスを神と信じる信仰に人を導き、信者を罪とサタンと死から解放することである。

3. イエスによる奇跡（ヨハネ 9：6～7）

6～7 節 イエスはこう言ってから、地面に唾をして、その唾で泥を作られた。そして、その泥を彼の目に塗って、「行って、シロアム（訳すと、遣わされた者）の池で洗いなさい」と言われた。そこで、彼は行って洗った。すると、見えるようになり、帰って行った。

- 泥が目に塗られただけで、まだ癒やされていない。「行って、シロアムの池で洗いなさい」と言われたが、それは盲人にとって大変なことであった。その場からシロアムの池までは、多くの人が行き交う階段状の坂道を下って行き、エルサレムの町の端にある池まで行かねばならない。イエスも弟子たちも同行しなかった。
- その道は、仮庵の祭りの間、毎日、祭司たちが祭壇に注ぐ水をシロアムの池で汲むために行進する大通りでもあった。

4. 近所の人たちの驚きと指導者層への報告（ヨハネ 9：8～14）

8～9 節 近所の人たちや、彼が物乞いであったのを前に見ていた人たちが言った。「これは座って物乞いをしていた人ではないか。」ある者たちは、「そうだ」と言い、ほかの者たちは「違う。似ているだけだ」と言った。当人は、「私がその人です」と言った。

10～12 節 そこで、彼らは言った。「では、おまえの目はどのようにして開いたのか。」彼は答えた。「イエスという方が泥を作って、私の目に塗り、『シロアムの池に行って洗いなさい』と言われました。それで、行って洗うと、見えるようになりました。」彼らが「その人はどこにいるのか」と言うと、彼は「知りません」と答えた。

13～14 節 人々は、前に目の見えなかったその人を、パリサイ人たちのところに連れて行った。イエスが泥を作って彼の目を開けたのは、安息日であった。

- 安息日であった・・・モーセの律法では、「安息日には仕事をしてはならない」と命じられていた。これについて、ユダヤ教パリサイ派では、「言い伝え」（または、口伝律法）と呼ばれる規則を設けて、【医療行為も仕事にあたり、安息日には緊急を要しない限り、すなわち容態や命に危険がない限り、医療行為をしてはならない】と教えていた
- 泥を作って・・・イエスが盲人の目を開ける奇跡をするにあたり、わざわざ「泥を作って」という方法をとった。イエスはことばだけでも癒やすことはできたはずだが、そうせず、地面にご自分の唾をして、濡れた土を手に取り、それを練って泥を作り、その泥を盲人の目に塗った。これにはどのような意図があったのか？
  - ① 口伝律法では・・・安息日にしてもよいかどうかの線引きを事細かに定めていた。たとえば、【ぶどう酒を臉の上に垂らすのはよいが、目の中に入れるのは禁止】、【ぶどう酒をパンに浸してそのパンを臉の上に置くのはよい】、【唾を吐いてそれを病人の目につけるのは、臉の上も目の中に入れるのも禁止】など。
  - ② では、イエスがしたこととはどうか？・・・唾を吐いてそれを直接目につけたわけではない。ぶどう酒であれば、パンに浸してそのパンを臉の上に置くとよいのであれば、唾を土にまぜて目に塗ったらどうなのか？ その時点での口伝律法には答えはない。だから、疑義が生じたら、それに関する規則を新たに設ける必要がある。こうして口伝律法はどんどん膨大になっていく。口伝であるから、書いてはいけない。しかし、規則すべてを記憶できるラビは一握りとなっていく。
  - ③ イエスの意図・・・イエスは口伝律法の愚かさ、そしてそれを神のことばとする欺きと罪深さを示すため、あえて泥を用いたのである。

D) 癒やされた人への指導者層による尋問と追放処分 (ヨハネ 9：15～34)

見えるようになった人は、指導者層による脅迫めいた尋問を受けても、イエスを神のみこころにかなう人であるはずと証言し、ユダヤ人社会から追放された

1. 癒やされた人に対する尋問 1 回目、指導者層の中で評価が割れる (ヨハネ 9：15～17)

15 節 こういうわけで再び、パリサイ人たちも、どのようにして見えるようになったのか、彼に尋ねた。

彼は、「あの方が私の目に泥を塗り、私が洗いました。それで今は見えるのです」と答えた。

16 節 a すると、パリサイ人のうちのある者たちは「その人は安息日を守らないのだから、神のもとから来た者ではない」と言った。

16 節 b (パリサイ人たちのうちの) ほかの者たちは、「罪人である者に、どうしてこのようなしるしを行うことができるだろうか」と言った。

16 節 c そして彼らの間に分裂が生じた。

17 節 そこで、彼らは再び、目の見えなかった人に言った。「おまえは、あの人についてどう思うか。あの人に目を開けてもらったのだから。」

彼は「あの方は預言者です」と答えた。

2. 両親に対する尋問、両親は指導者層の圧力を恐れた (ヨハネ 9：18～23)

18～19 節 ユダヤ人たちはこの人について、目が見えなかったのに見えるようになったことを信じず、ついには、目が見えるようになった人の両親を呼び出して、尋ねた。「この人は、あなたがたの息子か。盲目で生まれたとあなたがたが言っている者か。そうだとしたら、どうして今は見えるのか。」

20～21 節 そこで、両親は答えた。「これが私たちの息子で、盲目で生まれたことは知っています。しかし、どうして今見えているのかは知りません。だれが息子の目を開けてくれたのかも知りません。本人に聞いてください。もう大人です。自分のことは自分で話すでしょう。」

22～23 節 彼の両親がこう言ったのは、ユダヤ人たちを恐れたからであった。すでにユダヤ人たちは、イエスをキリストであると告白する者がいれば、会堂から追放すると決めていた。そのために彼の両親は、「もう大人ですから、息子に聞いてください」と言ったのである。

- 会堂から追放する・・・ユダヤ人社会から追放する。一切の社会的・経済的な活動から排除されるので、追放されると生活は立ち行かなくなる。

### 3. 癒やされた人に対する尋問 2 回目（ヨハネ 9：24～34）

24～25 節 そこで彼らは、目の見えなかったその人をもう一度呼び出して言った。「神に栄光を帰しなさい。私たちはあの人が罪人であることを知っているのだ。」彼は答えた。「あの方が罪人かどうか私は知りませんが、一つのことは知っています。私は盲目であったのに、今は見えるということです。」

- あの人が罪人である・・・指導者たちは、イエスを罪人、すなわち律法に違反していると判定。しかし、その律法は、旧約聖書に記されたモーセの律法ではない。ユダヤ教パリサイ派が作った言い伝え、口伝律法である。書かれた律法、モーセの律法に照らすなら、イエスには何の罪もない。

26～27 節 彼らは言った。「あの方はおまえに何をしたのか。どのようにしておまえの目を開けたのか。」彼は答えた。「すでに話しましたが、あなたがたは聞いてくれませんでした。なぜもう一度聞こうとするのですか。あなたがたも、あの方の弟子になりたいのですか。」

28～33 節 彼らは彼をののしって言った。「おまえはあの者の弟子だが、私たちはモーセの弟子だ。神がモーセに語られたということを私たちは知っている。しかし、あの者については、どこから来たのか知らない。」

その人は彼らに答えた。「これは驚きです。あの方がどこから来られたのか、あなたがたが知らないとは。あの方は私の目を開けてくださったのです。私たちは知っています。神は、罪人たちの言うことはお聞きになりませんが、神を敬い、神のみこころを行う者がいれば、その人の言うことはお聞きくださいます。盲目で生まれた者の目を開けた人がいるなどと、昔から聞いたことはありません。あの方が神から出ておられるのでなかったら、何もできなかったはずです。」

34 節 彼らは答えて言った。「おまえは全く罪の中に生まれていながら、私たちを教えるのか。」そして、彼を外に追い出した。

- おまえは全く罪の中に生まれていながら・・・生まれながら目が見えないという障害を「全く罪の中に生まれている」と表現している。背景にあるのは、当時のユダヤ教の教え、【目が見えないという障害をもって生まれてくる人は、その人自身か、両親か、どちらかが重い罪を犯したからだ。よって生まれつき目が見えないというのは神のさばきである】
- 私たちを教えるのか・・・当時のユダヤ教では、【障害をもって生まれる、とくに生まれながらの盲目は神のさばきによることなので、人の力で癒やすことはできない。神の赦しが必要である。それができるのは神から出たお方、メシアである】と教えていた。33 節の波線箇所の彼の陳述は、まさに指導者たちが民衆に教えていたことであった。それを言われて、指導者たちは怒り、「私たちを教えるのか」と怒鳴った。
- 彼を外へ追い出した・・・単に尋問の場所から外に出したではなく、会堂からの追放処分（22 節）、すなわちユダヤ人社会からの追放である。

E) 癒やされた人の霊的救い（ヨハネ 9：35～41）

イエスがこの人を捜し出し、ご自身をメシアであると告げると、彼は「主よ、信じます」と言って、イエスを礼拝した。礼拝したというのは、イエスを神として信じたということである。

1. 追放された彼をイエスが見つけ出して、霊的な救いに導いた（ヨハネ 9：35～38）

35～38 節 イエスは、ユダヤ人たちが彼を外に追い出したことを聞き、彼を見つけて出して言われた。「あなたは人の子を信じますか。」その人は答えた。「主よ、私が信じることができるよう教えてください。その人はどなたですか。」イエスは彼に言われた。「あなたはその人を見ています。あなたと話している人が、その人です。」

彼は「主よ、信じます」と言って、イエスを礼拝した。

- あなたは人の子を信じますか・・・「人の子」とはメシアの呼称のひとつ（ダニ 7：13）。「あなたはメシアを信じますか」という問い。
- 彼は「主よ、信じます」と言って、イエスを礼拝した・・・彼はイエスを預言者であると理解していた（11、17 節）が、ここでイエスをメシアと認め、さらに、礼拝した＝神が人となられたお方であると信じた。

2. 彼の信仰に対するイエスの応答（ヨハネ 9：39）

39 節 そこで、イエスは言われた。「わたしはさばきのためにこの世に来ました。

**目の見えない者が見えるようになり、見える者が盲目となる**ためです。」

➤ 目の見えない者が見えるようになり・・・

「目の見えない者」とは、彼を指す。「自分は罪の中で生まれて来た、自分は罪から解放される必要がある」と自覚していた人であった。

「見えるようになり」とは、救われて霊的な目が開かれ、天の事柄がよくわかるようになるということ。

➤ 見える者が盲目となる・・・

「見える者」とは、彼を尋問し追放処分にした指導者たち。自分たちは聖書の教えをよく知っているし、それに従った生活をしていると誇り、自分は罪人ではない、と思っている人たちである。だから、イエスが信者を罪とサタンと死から解放すると教えても、自分は罪人ではない、サタンに支配されてはいない、とイエスに反感をいだく。そして、イエスによる奇跡を目の当たりにしても、イエスをメシアとは認めず、神が遣わしたお方であることも認めない。その結果、「盲目となる」、聖書をわかっているつもりでも、神のことが全くわからなくなる。霊的な目が開かれず、ますます闇の中に深く沈んでいく。

3. パリサイ人の質問（ヨハネ 9：40～41）

40～41 節 パリサイ人の中でイエスとともにいた者たちが、このことを聞いて、イエスに言った。「私たちも盲目なのですか。」イエスは彼らに言われた。「もしあなたがたが盲目であったなら、あなたがたに罪はなかったでしょう。しかし、今、『私たちは見える』と言っているのですから、あなたがたの罪は残ります。」

➤ パリサイ人・・・ユダヤ教パリサイ派のラビ（教師）。「イエスとともにいた」とは、イエスの弟子となっていたということではなく、イエスを監視し、イエスを非難する口実を見つけようとしていた。

➤ 今、『私たちは見える』と言っているのですから、あなたがたの罪は残ります・・・人が救われ、罪から解放されるためには、自分が罪の中で生まれ、罪の奴隷として生きているという現状を認める必要がある。当時のイスラエルの民の中で、自分が罪の中で生まれてきたという自覚があり、罪からの解放を願っている人は、「生まれたときから目の見えない人」であった。これに対し、パリサイ人には、自分も罪人のひとりだという自覚はなかった。